

女子書翰文

女子書
印

特260

713

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



特260
713

土口田苞竹編書



女子書翰文



東京書壇社發行

目次

一、年賀狀	一
一、同	二
一、かるた會に招く	三
一、同 返事	五
一、在宅を問合す	七
一、同 返事	八
一、試験合格を祝ふ	九
一、卒業をいはふ	一一
一、歸宅報知	一四
一、途中より家に	一五
一、同窓會の通知	一八

一、看護婦を頼む	一九
一、出産を報ず	二一
一、開店を祝ふ	二三
一、梅雨見舞	二五
一、寫眞をおくる	二七
一、同 返事	二八
一、染物を頼む	三〇
一、書物を借る	三一
一、同 返事	三三
一、留守居を頼む	三四
一、團扇をおくる	三六
一、同 返事	三七
一、暑中見舞	三九

一、友人の居處を問ふ……………	四一	一、病氣報知……………	六三
一、同 返事……………	四二	一、人を紹介す……………	六五
一、祭禮に招く……………	四四	一、傘を返す……………	六七
一、同 返事……………	四五	一、悔 状……………	六九
一、近火見舞……………	四七	一、歳暮に……………	七一
一、同 返事……………	四九		
一、鮮魚をおくる……………	五一		
一、裁縫をたのむ……………	五二		
一、同 返事……………	五四		
一、雑誌の購讀を申入る……………	五五		
一、滞在日數を問合す……………	五七		
一、同 返事……………	五八		
一、出立を報ず……………	六一		

以上

女子書翰文

芭竹居編書

年賀状

手紙の多しの由より

日出度祝ひと希す

同

謹みて市代の業を祝

し併きて市一回様を

市健々原成新をなまら

引る多きよ招く

来り五日後に時を

例年のやうに新がかるた

會談ひらふふふふふふふふふふ
杉子様も花子様を見
まはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるる

まはるる

まはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるる

旅をたすくくろくろに幸ひ
つなぐの冬子様も来
合きくろくろくろくろ
とくろくろくろくろくろ

左巻を問合す

家屋のくろくろくろくろ
くろくろくろくろくろくろ
くろくろくろくろくろくろ

ふ明細舞とつた
市都合伺とふ

返事

今晚と授とつた
他とつた

約束とつた
勝手

ながとつた
明細九時頃

ふたれとつた
つた

試験合格を祝ふ

市第君より此度海軍

兵學校の入学試験に

の合格遊びとされおど

市本人も申すよ及ご

+

十一

活一心のつよらふに如

かうかと思察付る所

を市親からおぼし

卒業生に

市許様よりこのほど高
等女学校卒業等の
成績より市立業遊
をこれより誠にお目

出交存より此品粗末
なごう市視の印を
差くらひ申し市笑納に
たれまゝに

端宅報知

留守年一ちつらくひを

話様とならむしあが

たゞそんじふ原出先の

都令ぞ時晩十時おろく

帰もついでにまじりし

の話ハおろしきまじりの

年守中よりおろし

家計、中々、子と、おひ

つ、おひ、な、か、の、おひ、

おひ、おひ、おひ、おひ、

おひ、おひ、おひ、おひ、

おひ、おひ、おひ、おひ、

おひ、おひ、おひ、おひ、

おひ、おひ、おひ、おひ、

おひ、おひ、おひ、

回覧書の通し

此方 杉田先生が久しで

市上京せられまゝたゞ

係れ同級生に縁上げ

専ら廿二日学校で其

いふことゝなせし

市上京せし中席下

看取物を転む

婦よりこの目末頃出産
の咄でござるは心おれぬ
まゝお前様より申され候
ひたし申され候へば何

より申され候へば何
たゞけおせんりの候みい
まゝお前様より申され候

申され候へば何

婦子 昨夜 娘を 産む 娘

御一人 とも 玉にて 御

の 御 御 御 御 下 下 下

かゝる 御 御 御 御 御

侍 侍 侍 侍 侍 侍 侍

中 中 中 中 中

心 心 心 心 心 心 心

心 心 心 心 心 心 心

古つ井之店おきくはれおきく
の浦是れおきくとおきく
中あがふ此上ちおきく
活勉強日増しの年々大の

ほど新あがふ先さの祝
おきく

梅雨見舞

いよ梅雨だううか

毎日の、降る通ふれら
あまが、決んで、さうさ
あたまを、揺ら、さうさ
うら、さうさ、あまの、さうさ

あまが、あまの、さうさ、さうさ
写真を、あま

あまが、あまの、さうさ、さうさ
あまの、昨日、さうさ、さうさ

おーたま〜〜 勤いそろあすふ

鬼子角古目ううまゆふふ

る〜

市令息様の古あすは

いそあきとせ〜 只かすま

早あお目うあうま〜

〜〜〜

古口つ〜 古目

ひびあまた掃とそらう

てら先とゆらやまがし

染物乾乾む

子供物振袖の染方玉

名所頼みかふらふの

ちよとふく次弟よく心は

たふ人市書し下たみう

書物を借る

紅葉全集一巻以し

分折り中し古巻支し

と云ふ一冊づき挿借致

すゝと云ふ各何と云ふ

返事

市川路の書物只今不

用より付録と云はれ下され

分り当いろく話話也

いれあつては、
いれあつては、
いれあつては、
いれあつては、
いれあつては、

留守居を頼む

八月一はい招行致一たい

ねがまが、
ねがまが、
ねがまが、
ねがまが、
ねがまが、

かゝるに、
かゝるに、
かゝるに、
かゝるに、
かゝるに、

玉ふるに、
玉ふるに、
玉ふるに、
玉ふるに、
玉ふるに、

うせ下す、
うせ下す、
うせ下す、
うせ下す、
うせ下す、

團扇をひらく

かきくむくむくむくむくむくむくむく

ひらひらひらひらひらひらひらひらひら

当地の團扇形にひらく

たかたかたかたかたかたかたかたかたか

あまのこはなはなはなはなはなはなはな

むくむく

名物たる團扇はなはなはなはなはなはなはな

たれあふくはなは形の
あひしるまはりの流し子
風のくくくはひゆち流し
古志はひまはるまはる嬉し

くはなはひのくくく
はなはひのくくく
まあなんとおはなはひ
せし夕景はくくくはひ

とおちうもあいらいあいらんか
ふの西ふたう田あから
あうあうあうあうあう
うたうあう

友人の居交を問ふ
目聖清子様よ玉急用
事お生じあうあうあう
り先れあうあうあう

いぬねのついでに市存知の

うらなひのふたれがうら

返る

市問合の清子様のおうり

おまの左記の通しうら

尤も本日廿日頃より

市出のうらやまのうら

度市知らるる下たる

祭禮に招く

来り十日當部 結ぶ

祭禮に付 古子様寺の連

の上 朝より 市本様(いさね)

たぐ 古行中 上分

五

活祭にれよ 招き いたれ

有難く あり 新

折るく手板一にうし用
 りふあう子供だん中集
 と致々ま〜〜くわらわ邪魔心
 ち〜〜く〜〜く〜〜く〜〜く

近火見舞

昨夜、古近火、れあう枝
 ぶ〜〜く〜〜く〜〜く〜〜く
 接〜〜く〜〜く〜〜く〜〜く

山被書と、ふらふらと物也

早來(山見)舞ふと、決て書

能まらふよ、まのふらふと存

わがと手紙とて、さし

返事

早來(山見)舞ふと、決て書

能まらふよ、まのふらふと存

山被書と、ふらふらと物也

取片付くくまがももむらす

百七ゆく結い火つー物

何春古お種いさむきま

先と市籍のこあらくー故

解魚の成おる

今朝ほごまうーくーの

浦々地引にーりい魚類

使と持いさーあけらる

古袋味下されふし

裁縫をよめる

毎し市手敷おのふ中

ふし主人より来日早

行旅まきふり行る替

ものニ之扱市手す

市仕を下さるる

合のむし程

るるる

あなごの用仰付けられ有

難くぞんじし何れもあ

てもおつりよ合を申すぞく精

市はをものも晩あといひ

よりあといひまづくひり

難法の購読を申す

活紙書りの書き法購

讀みし一巻のり本日辨

より出逢ふ心されきく物

朝の代金きき年分振替

便より拂込や有子し

滞を日数を問合す

ふのむに市上きりきた

ききしはるが何日頃かき滞

をてきか一度伺つて出候

かゝるいふものな。

京都名堂一寺、日射る、一丁

の如くを下さ、

返り

二三方あり、中々、と安らぐ、

が、怪し、く、く、また、

く、く、く、く、く、く、

滞、在、れ、臨、定、て、

一、あつたが、用事も片づく
お告ごすから、お分るもお告ご
下さい、私うもい、ほ、い、伺
い、ま、頃

出立線報告

通つて、お話中、お通つ
明後十八日午後五時十五分
東京御曹の汽車まで

出たのりよお定免り
其の一寸集上出物乞
中々な山ても以て用
るふれあり物乞何

ひの収物出老人採心始
免出一定採くよまーく
出物人ふたれ身しーし

病急事報知

妹のあはれを来世まで
多しゆきふしの診察
を又ふふ又肺尖の塊
候ありと申され有程症

とらなげに病つゝも念は
るる所知らるるやうに
子に

人成紹介寸

花園玉枝め史よのたむ

上京さくら先生よ

清田と云ふ

所い京都念仏

也幸ひしと承引

はが古摺圖の時

同是の句に

今年

昨日の借し

あつちをへてあつちをへて悔を

かした只今侍に持て

てうるくしあつちをへて一寸

古籍かきとすしこ

悔状

某様子古心はくの

甲斐又もしくあつちをへて

成持をへてあつちをへて

静かきばらうと古き

皆様の心懸待如何に

ことお察し申上る回封

香の奥古き重き前より供

ふたれなる先も心持

歳暮よ

今年もいよく餅日少く

たごきく古き用の心

存下此品雅少好
 心未平心平の心平心平心平
 心平心平心平心平心平

女子書翰文

苞竹居編書

年賀狀

年のはじめの御よろこび目出度祝ひ上げ候。

同

謹みて御代の萬歳を祝し、併せて御一同様の御健康を祈り奉り候。

歌留多會に招く

来る五日午後六時から、例年のやうに、私方でかるた會をひらきます。当日は松子様も花子様も見える筈です。弟様も御同道で是非御出で下さい。

返事

かるた合戦御催しに御招き下され、有難うございます。弟

などは今から腕をさすつてゐます。幸ひ御存じの冬子様も來合せてゐますから援軍として召つれます。

在宅を問合せ

家屋の事につき、さしかゝり御目にかゝりたきこと出來致し候まゝ、今夕か明朝参上いたしたく、御都合伺上げ候。

返事

今晚は據なく他へ参る約束これあり候まゝ、勝手ながら明朝九時頃御出下されたく候。草々。

試験合格を祝ふ

御弟君には、此度海軍兵學校の入學試験に御合格遊ばされ候よし、御本人は申すに及ばず、御一門の御よろこび如何

ばかりかと推察仕候。取敢ず御祝申上候。かしこ。

卒業をいはふ

御許様には、このたび高等女學校を優等の御成績にて御卒業遊ばされ候よし、誠に御目出度存じ候。此品粗末ながら御祝の印までに差上げ候まゝ、御笑納下されたく候。かしこ。

歸宅報知

留守中は、いろ／＼御世話様になりましてありがたうぞんじます。出先の都合で、昨晚十時やう／＼歸宅いたしました。つもる御話は近日參上の節に。

途中より家に

家を出てからふとおもひつきましたが、今日の午後に琴子さんが、本を取りにこられるかも知れません。もし見えましたら、私の机の上に新聞紙につゝんでありますから、それを上げて下さい。

同窓會の通知

此度、松田先生が久々で御上京せられましたから、例の同

級會を繰上げ、来る廿八日學校で開くことにいたしました。萬障さしくり御出席下さい。

看護婦を頼む

姉事、この月末頃出産の筈ですが、是非おなじみの御前様に御出を願ひたいと申してゐます。何とか御都合して来ていたゞけませんか。御頼みいたします。

出産を報ず

姉事、昨夜男子を分娩致し、兩人とも至て健かに御坐候間、御安神下され度候。かね／＼御配慮くだされ候まゝ、一寸御知らせ申上げ候。

開店を祝ふ

かねての御望通り、いよ／＼御開店遊ばされ候よし、御満足の御事と御喜び申あげ候。此上はますます御勉強日増に御盛大のほど祈あげ候。先は御祝まで。かしこ。

梅雨見舞

いかに梅雨だからとて、かう毎日々々降り通されては、氣

が沈んでしまいます。あなた様はどうしておくらしですか。

御暇の節は、どうぞ御遊びに御出下さい。

寫眞をおくる

兼て御約束の子供の寫眞、昨日やう／＼出來ました。すこし動いてゐますが、兎に角御目にかけます。

返事

御令息様の御寫眞、御葉書と共に只今着。早速お目に懸りました。今にも笑はうとしてゐる御口づきや、涼しい御目もとなど、あなた様とそっくりです。先は御うけまで。かしこ。

染物を頼む

子供物振袖の染方、至急御頼み申度候間、このはがき届き次第、よく心得たる人御遣し下され度候。

書物を借る

紅葉全集一覽いたし度候間、もし御差支これなく候はゞ、一冊づゝ拜借致たく、御都合伺上候。かしこ。

返事

御尋ねの書物、只今不用に付、緩々御覽下され度候。尙いろ／＼御話もこれあり候間、御序の節御立寄下されたく候。かしこ。

留守居を頼む

八月一ぱい旅行致したいのですが、例年通り、御留守居は願はれないでせうか。至急御都合を御聞かせ下さい。

團扇をおくる

やう／＼夏めき候ところ、いかに御暮し遊ばされ候や。當地の團扇形のひなびたるが面白く覺え候まゝ、兩三本御目にかかけ候。かしこ。

返事

名物の團扇御送り下され、有がたく存じ候。形のおもしろきのみか涼しき風をよくかよひ候は、深き御志のこもれるにかと嬉しく存じ候。御請のみ。かしこ。

暑中見舞

まあ、なんとお暑いことせう。夕景からちと御遊にお出
かけ下さいませんか。この西瓜スイカさる田舎いなかから送つて来まし
たから、御わけします。

友人の居處を問ふ

月野清子様に至念用事相生じ候ところ、御旅行先の御宿處
わかりかね候に付、もし御存知ならば御示し下され度候。
かしこ。

返事

御問合の清子様の御宿處は左記の通りに御坐候。尤も本月
廿日頃よりは他へ御出かけのことに候。其都度御知らせ
下さる筈に候。

祭禮に招く

来る十日、當村（邸と村は同字）鎮守の祭禮に付、御子様
達御連の上、朝より御來遊下されたく御待申上げ候。

返事

御祭禮（禮と礼は同じ）に御招き下され、有難く存じ候。

私は折悪く手放しがたき用事これあり、子供だけ參上致さ
せたく候間、御邪魔ながら宜しく願上候。

近火見舞

昨夜は、御近火これあり候よし、さぞ御驚き遊ばされ
候こと存じ候。御被害はこれなく候や。早速御見舞に參
堂致すべき處、御取込と存じわざと手紙にて。草々。

返事

早速御見舞下されありがたく存じ候。幸ひ消防行届き候爲
め、諸道具取片付くるまでも至らず、間もなく鎮火いた
し候。何卒御安神下されたく候。先は御禮のみ。あら
かしこ。

鮮魚をおくる

今朝ほど、めづらしくこの浦の地引にかゝり候魚類、使に
持たせさしあげ候間、御笑味下され度候。匆々。

裁縫をたのむ

毎々御手数相かけ恐入候へども、主人事、來月早々旅行致

すべく候に付、着替のもの二三枚御手すきならば、御仕立
下さるまじく候や。御都合御もらしの程願上候。

返事

毎度御用仰付られ有難くぞんじ候。何はおきても御間に合
せ申すべく候。御仕立ものは晩ほどいたゞきに參上致すべ
く候。かしこ。

雑誌の購讀を申入る

御社發行の書道誌、購讀いたし度候間、來月號より御送付
下されたく候。本日代金壹ヶ年分振替便にて拂込申候。草
々。

滞在日数を問合す

このたび御上京になつたさうですが、何日頃まで御滞在で
すか。一度伺つて御話申たいと存じますから、御都合宜し
き日時を一寸御知らせ下さい。

返事

二三日前出て参りましたが、忙しくてまだ失禮してゐます。

來月初旬までは滞在の豫定です。もう一兩日で用事も片づ
く筈ですから、夜分でもお出下さい。私からもいづれ御
伺いたします。

出立を報ず

兼て御話申上候通り、明後十八日午後五時十五分東京驛發
の汽車にて出立の事に相定め候。其前一寸參上御暇乞申上
度候へども、いろ／＼用事これあり、残念ながら伺ひかね
候。御老人様御始め、御一統様へよろしく御傳へ下され度
候。かしこ。

病氣報知

妹事、兩三日來發熱いたし候まゝ、醫師の診斷を受け候處、
肺炎の兆候ありと申され候。輕症とは存じ候へども、念の
ため御知らせ申上候。草々。

人を紹介す

花園玉枝女史、このたび上京せられ先生に是非御面會いた
し度と申居候。御都合如何に候や。幸ひに御承引下され候

377
543

はゞ、御指圖の時間に私同道御伺ひ申すべく候。かしこ。

傘を返す

昨日は拜借した傘のおかげで、ぬれずに歸りました。只今使に持たせて御返し致します。一寸御禮まで。かしこ。

悔 状

某様事、御心づくしの甲斐もなく、遂に御永眠遊ばされ候よし、只々驚入るばかりに御座候。皆様の御愁傷如何許かと御察し申上候。同封香奠御靈前に御供へ下され度、先は御悔まで。

歳暮に

本年もいよ／＼餘日少く、さぞ／＼御多用の御事と存じ候。此品輕少なから御歳暮の印までに御目にかけて候。かしこ。

X
X
X

書翰心得八箇條

- 一、御祝の手紙は墨黒々と書くこと。
- 一、「御」「奉」などの文字は、一番下にならないやう書くこと。
- 一、「候」は一番上には書かないこと。
- 一、宛名はなるべく上に。自分の名前は半分以下に書くこと。
- 一、巻紙は文字を内側にして、後の方から巻くこと。
- 一、宛名は決して折らないこと。
- 一、封筒に入れるときは倒にならないやう氣を付けること。
- 一、郵便規則をよく心得て、先方に迷惑をかけること。

以上

昭和十二年十一月十五日印
昭和十二年十一月二十日發行

女子書翰文

定價金八拾錢

筆 者 吉 田 茂 松
發行者 松 原 酉 三
印刷所 書壇社印刷部

復 製
不 許

發行所

東京市麻布區本村町百十六番地
書壇社出版部
電話三〇(四)四六五二番
播替東京九一二一番

終

